

古代伝承のトリック

大久間喜一郎

これからお話し申し上げる古代伝承という言葉に就きましては、今、これをやや狭く限定して、古代説話と言い直した方が、これからの私の話では判りやすいかとも存じます。そこで古代説話と言ひ換えさせて頂きますが、古代説話というものは、まことに不思議な要素をいろいろと抱え込んでいるものだと存じます。それに就いて、世界中に分布していると言われる白鳥処女説話を例にとってお話してみようかと存じます。

白鳥処女説話、それは勿論、日本にも古い時代からあります。上代の文献に見えるものとして、次の三つの話は名高いものになっています。

奈良社の縁起 △丹後国風土記逸文▽

伊香の小江 △近江国風土記逸文▽

三保の松原 △駿河国風土記逸文▽

これらの中、奈良社の縁起を説く説話には、白鳥は天女あまのつとめ八人の形で登場いたしますが、主人公の天女は豊宇賀能売の命であって、伊勢外宮の祭神豊受大神だということになっています。次の伊香の小江の話でも、白鳥となって天から降ったのは、やはり天の八女で、水浴の最中に羽衣を盗まれた主人公の名は伝わっていないが、やはり後に再び羽衣

を得て、男女各二人の子供を残して天界へ帰ってゆく。最後の三保の松原の話は、誰方も御存じの謡曲「羽衣」の原形となっている話でございます。

ところで、白鳥処女説話というのは、どんなストーリーをもっている説話であるかということ、大方の白鳥処女説話に共通する話の筋を取り出して、簡単に話し申し上げてみたいと存じます。

何羽かの白鳥が天界からこの国へやって来て水辺へ降りる。鳥たちは羽の衣を脱ぐと、いずれも美しい裸体の処女となつて水浴をはじめるといふことになります。そうすると何時も決まっているのですが、そこには一人の男がいて垣間見をいたします。そこで男は、自分が気に入った一番美しい娘の羽の衣、つまり羽衣を盗みます。これは自分自身で盗んだり、あるいは飼犬に盗ませたりいたします。やがて他の処女たちは水浴びが終ると、てんでに羽衣を身に着けて天界へ飛び立ってゆくのですが、羽衣を盗まれた処女だけは帰ることができない。うろろろしていると、そこへ最前の男が羽衣をもって姿をあらわし、処女に結婚を強要いたします。そこで女は止むを得ず、その男との結婚を承諾する。と言うのは、故国に帰る望みを絶たれた女は、生活の基盤を失ってしまったことになるわけで、結婚するよりほか仕方がなかったのです。

こうして何年か結婚生活を送った女は、やがて何人かの子供を生みます。あるいは子供が生まれない場合もございます。今、子供が生まれた話を例にとつて考えましょう。白鳥の妻は、ある日偶然のことから、良人が隠しておいたなつかしい羽衣を手に入れます。そこでその羽衣を身に着けると、愛する子供たちや長年夫婦としてくらしした良人のことも忘れて、空の彼方へ飛び立って行ってしまふ。そして二度と帰つて来ない。良人は愛する妻への思いが断ち切れず、「伊香の小江」の叙述を借りて言えば、「空しき床を守りて、なが詠を断たざりき」というわけで、つまり欲求不満のままで一生涯を送つたということになります。

さて、こうした簡単な筋書からでも、随分おかしなことがあるのが気になるもので、まずその一つとして、処女の水浴を垣間見る男が必ず一人に限っているということも、考えてみれば随分不思議なことです。

また、美女と羽衣という宝物を手に入れた男が、一度でもよいから、羽衣を自分が着てみようと思わなかったといふことは、一層不思議に思われます。

さらに、何年か結婚生活を送った女が、何故、良人や愛する子供まで残して、故国へ帰ってしまったわけならぬのか。これも不思議なことのつどと私には思われます。

こうした疑問について、私は私なりに一応の答は用意している積りでございます。というのは、白鳥処女説話の本来の形というものを考えると、大体の解決がついてくるのではないかと思われれます。我々は、空をとぶ神秘的な羽衣といったものに迷わされやすいのですが、白鳥処女の本体は、とにかく鳥であると確信して居ります。これは未開社会——例えばオーストラリアあたりの未開社会から嘗て採集された話、あるいはエスキモーたちの伝承の中に残された話などをいろいろ較べてみますと、羽の衣(羽衣)というのはまさに鳥の羽であって、白鳥処女といっても、その本体は鳥である。そうした鳥といった異類と人間界の女の姿とが羽の衣を脱いだり着たりすることによって入れ替わるといふことは、そうした古い伝承には数多くあることでございます。これは鳥ではないのですが、靈異記の狐妻の場合なども、狐が若い女に化けて人間の男と結婚する。そして、やがて正体が現れて元の狐となって森の中へ帰ってゆく。これは狐だから人間に化けやすいのだといった、後世の怪異譚へ結びつけて考えてはいけませんので、異類の中には、ある時は人間の姿になったり、また元の異類の姿に戻ったりするといった、特殊の能力に恵まれた存在がある。と信ぜられていたことは、原始的な説話の中にはしばしば出て参ります。白鳥処女説話の場合、この国へやって来た時の姿は若い娘の姿で、帰ってゆく時の姿は鳥の姿です。つまり、人間界へ来たときは異類から人間になり、故国へ帰る時は再び異類の姿となるということが、数多くの説話によって証明されると考えられます。そうすると、白鳥処女の本体は鳥であるといつてよいと存じます。

さて、そこで先程申し上げた三つの疑問について、私の答えを申し上げてみようと思ひます。

まず第一の疑問として、男は、自分が手に入れた羽の衣を何故着ようとはしなかったのだらうかという点に就いてでございますが、これは、着たくとも着られなかったのだと言つて良さそうです。それは白鳥の処女のように本体が鳥ではなかったからです。そうしたことは、古い時代にあつては、説明されなくても誰もが知つていたことだつたと考えられます。だから説話の中でも、そうした点に触れようとはしなかったのでございましょう。またこの問題は次のような面からも説明することができると存じます。それは、男というものは呪的能力というものを有たないのが普

通の姿でありまして、大變古いところから申しますと、世の中が農耕時代に入って参りますと、農耕社会で行われた呪術の主体、つまり呪術を司る人物は、女性であることが普通になって参ります。白鳥処女説話というものも、恐らく農耕社会で生まれ育った説話に違いないでしょうから、この処女に呪術的能力を空想する人もあつたはずで、その反面、男はその点では無能力であつたわけですから、誰も男に羽衣を着せてみようとは考えなかつたのでございましょう。

さて、第二の疑問として、羽衣を着けた女が、良人や愛する子供を残して、故国へ帰ってゆくのは何故だろうかという事でございます。尤も子供を連れてゆく話もございます。子供が四人生まれるまでは、羽衣の在り処を女に話してはいけないなどという話があつて、子供が三人生まれたところで、もうよかろうと思つて良人が羽衣の隠し場所を教えたところ、女は二人の子を両腋へ抱え、一人は股へ狭んで飛び立つていったなどという、甚だ合理的に作られた話もございますが、とにかく良人への未練や子供への愛情を断ち切らせるものは何か、と言えば、それは羽衣を着ることによつて女が異類になつたということでありませう。前にお話した靈異記の狐妻のように、良人が引きとめるにも拘らず、狐となつた妻はどうしても森の中へ帰つてゆく。やはり人間と異類との間には厚い壁があつたということもございます。それに関連して申し上げますと、竹取物語の末尾に、天人がかぐや姫に羽衣を着せようとする、かぐや姫は「衣着せつる人は、心異になるなり」と、そんなふうに出て居ります。これは古い時代の考え方が伝承されているので、竹取物語の作者が思いついた合理的説明ではないと存じます。

さて、話の順序が逆になってしまいましたが、最後に、処女の水浴を垣間見る男は何故一人に限るのかという疑問でございます。実は本日の話の中心は、そこいら辺にもつていかなければならないかと存じて居るのですけれど、結論は簡単で、それはこの物語を展開させる基本条件であり、物語展開の重要な契機となるものだからであるということです。つまり男が二人であつたら、必ず妻争いという別の興味へ話が進展してゆく契機となるに違いないと考えられるからです。アラビアン・ナイトに見える、白鳥処女説話を基本的プロットに据えた、「パッソラーのハッサン」という長篇物語は、基本的プロットに多くの話が附着して居りますが、それでも処女の水浴を垣間見る男はやはり一人に決めてあります。こうした特殊な設定こそ、古代伝承におけるトリックと言つてよかろうと存じます。

ところで、このトリックという語が、こうした場合に果して適切な用語であるかどうか、今、広辞苑を参照してみますと、「詭計」「奸計」「たくらみ」「ごまかし」などの意味がございます。古代の説話においては、必ずしも「たくらみ」や「ごまかし」の意味はなかったかも知れないけれど、こうした古い物語の中での、ある特殊な設定を、現代の感覚から、「物語的たくらみ」と考えて、トリックということばを使ってみたわけでございます。

○

それではもう一つ。白鳥処女説話とつながりをもつ昔話——民間の七夕説話とでも言ったらよいかとも思われますが——「七夕女房」の話に触れておこうかと存じます。

「七夕女房」の昔話というのは、只今述べた白鳥処女説話の発展した形という趣を備えて居りまして、その大体の筋は次のような形になって居ります。

さて、この国で何年間か良人と一緒に暮らした白鳥の妻は、再び手に入れた羽の衣を身に着けて天界へ帰ってゆくうと致しますが、良人が悲しんで妻の跡を慕うものですから、妻は天へ昇る方法を良人に教えて天界へ戻ってゆきます。そしてその後から、良人は妻に教えられた通りにして天へ昇ってゆくのですが、天へ昇るにはいろいろな方法があるようです。瓜や豆を植えて急速に成長させ、それが天まで届いたところで、その蔓を伝わって天界へ昇る方法とか、あるいは、天人が水を汲むために一定の時期に天から下ろしてくる釣瓶の中に身をひそめていて、天へ引き上げられる方法とか、いろいろあるようです。因みに、天人は何のために、天から釣瓶を下ろして地上の水を汲み上げるのかと申しますと、天界では大方水が不足で、いつも乾いているということですから。何故かという点、少々水があっても、大抵雨となって降ってしまう。それで天はいつもカラカラなのだということです。

さて、そんなふうにして、妻の後から天界へよじ上った良人は、なつかしい妻と逢うことができます。丁度、今、天ではまくわ瓜の収穫期で、誰もが大忙しで働いて居ります。天へ昇った良人も、妻の鳥仕事を手伝ったりしているうちに、仕事も一段落すると、妻は良人を自分の親のところへ連れて行って、親見参（おやげんぞ）をさせようと申します。良人が喜んで妻の跡からついて参りますと、妻は途々、父親がまくわ瓜を縦に切りなさいと言って、決し

て縦に切ってはならない、横に切りなさいと良人に教えますが、男は正式に結婚できる嬉しさで、上の空で返事をしたりして居ります。

ところで、この親見参と申しますのは、平安時代などで「所願はし」と言われた儀式の本源的な意味と大体同じものであるうかと思つて居ります。つまり、一定期間のテスト結婚が終つて、婿を嫁の両親に引き逢わせることのでき

ます。さて、妻の親に引き逢わされた男は、父親からちやほやされて、目の前のまくわ瓜を勧められます。いい気になつて心を許した男は、妻の忠告も忘れて、父親の言うままにまくわ瓜を縦に切つてしまいます。すると見る間に瓜から大水が溢れ出て、二人はそれぞれ大きな河の対岸に流されてしまふ。そこで、二人は大声で呼び合います。妻が「あなた、せめて一月に一度逢いましょう」と言うと、向う岸が遠いものだから聞き違えて、「なに、一年に一回だつて」と言つたものだから、二人は一年に一回しか逢えなくなつてしまつた。これが七夕の起源だと申します。あるいは、こんなふうにも申します。妻のことばに答えて、良人が「そうだ、一ヶ月に一回逢おう」と言うと、どこからかアマゾンジャクが出てきて、「駄目だ、一年に一度だ」と言つたので、一年に一度だけ逢ふことになつたなどという話もござ

います。ところで、この話の中にも、先程申し上げたトリックとでも言うべきものがござります。その一つとして、女は男に、まくわ瓜を縦に切つてはいけないと教えながら、その禁を破ると二人は結婚生活が出来なくなるといふ、男にまつて一番望ましくない結果を何故話さなかつたかということ。これはむしろ不自然な筋立てと言へるかと思ひます。これは明らかに七夕の起源を作り上げるためのトリックです。古代の説話には、これと類似のモチーフは方々に存在いたします。例えば水江の浦島子の伝承にしてもそうです。万葉の虫麻呂歌集所出の長歌によれば、「わたつみの神の女」は、浦島との別れに際して、玉匣を浦島に持たせて、この匣の蓋を開けるなとは言ひますが、開けるとこれの結果になるとは何故教えなかつたのか。「この匣 開くなゆめ」と言つただけでは、愚かなこの世の人には判りません。第一、部屋の戸なり何なりを、決して開けてはならないと言われると、古い説話の世界では、必ず開けることになつていて、物語はその時点から新しい展開を見せるのが大体の決まりです。浦島や七夕女房の場合は、そ

れが究極の破綻へ追い込まれてゆくわけです。如何に重要な場面にトリックが使われているかということを確認して頂きたいと存じます。それから、もう一つの問題として、妻が折角、一ヶ月に一度逢おうと言ったのに、一年に一度と聞き違えたという馬鹿々々しい失策です。これも明らかなトリックですが、聞き違えということをも不合理と思う人もあつたらしく、それでアマンジャクという切札を登場させる話があるのだと存じます。このアマンジャクで代表される要素も、私の申し上げるトリックに他なりません。

○

こうしたトリック的なモチーフというものを、古代文学の中から幾つか拾ってみようと思存します。

天佐具売 まず、古事記の説話の中から天佐具売の話を取り上げてみることにいたしました。

高天原の神々は、葦原の中つ国を視察させるために、さきに派遣した天菩比神がなしの、磔になつてしまつたので、新たに天若日子を送ることになりました。ところが天若日子は、中つ国を領有していた大国主神の女、下照比売を妻にして新婚生活を送っていたとでもいまいましようか、この神もさっぱり音沙汰がないということになりました。そこで高天原の神々はまた相談いたしました、今度は鳴女という雉を派遣して、天若日子を詰問することになりました。雉は天若日子の家の入口にある湯津楓の木に止まつて、「いかにか八年に至るまで復奏さざる」と言つて責めると、そこへ登場したのが天佐具売で、古事記はこんなふう言つて居ります。

ここに天佐具売、この鳥の言ふことを聞きて、天若日子に語りて言ひしく、「この鳥は、その鳴く音甚悪し。故、射殺すべし。」と云ひ進むる即ち、天若日子、天つ神の賜へりし天之波十弓、天之加久矢を持ちて、その雉を射殺しき。

こんな訳で、雉の体を貫通した矢は、高天原を突きぬけて、高木神の許に届きました。高木神は天若日子に邪な心があるならば「天若日子この矢に禍れ」と言つて、血の着いた矢を、さきに突き抜けた穴から投げ返しますと、天若日子は朝床の中で胸に矢が刺さつて、にわかに亡くなつてしまします。

天つ神の命を受けた雉の詰問の詞は、恐らく天若日子には判つていたのでしょうけれど、天佐具売の詞に従つたも

のだから、罰を受けて死ななければならなかった訳でございます。この天佐具売というのは一体何者なのでありましょうか。書紀では天探女と書かれて居りまして、恐らく災いの根源などを探り出す女性呪術者であるのでしようが、突然にここに出現し二度とその後姿を見せないことも、妙と言えば妙な話です。こうした役割をもっている探女という存在が、古代にあつては妖術使いか何かのように、一般の人からは薄気味わるいものに考えられていただろうということは、容易く想像されます。こんなところから、本来、神聖なはずの天佐具売が、天若日子に禍いをもたらす人物となつてしまったのだと説明することが出来るかと存じます。そしてこの天佐具売が昔話の世界でいうアマノジャクあるいはアマノジャクのことだと言われて居りますことも、探女についての当時の世間の印象というものを推し量ると、そのつながりに一つの筋が通つてくると思われれます。そうだとすると、古事記の天佐具売も七夕女房のアマンジャクも、本来の正しい姿で登場してくるわけではなくて、歪められた姿で出てくるわけですから、探女本来の職能が描かれる余地はございません。ですから、元来、祭式面から空想されたギリシア神話の怪物ゴルゴーンに満足な胴体がなかつたように、天佐具売もアマノジャクも行動に伴うイメージというものがなくて、只突然とび出してきて禍いの種子を蒔いて姿を消してしまうことになるのでございましょう。

猿女の由来 天孫降臨に際して、邇々芸命の一行が高天原から降つて参りますと、天の八衢に立って光り耀く異形の神があつた。その神は国つ神で猿田毘古神と申しました。その神と向き合つて、遂にその神の名を顕わしたのが、天孫一行の中にいた天宇受売神だということになつて居ります。それについて古事記では次のように述べて居ります。

故ここに天宇受売命に詔りたまひしく、「この御前に立ちて仕へ奉りし猿田毘古大神は、専ら顕はし申せし汝送
り奉れ。またその神の御名は、汝負ひて仕へ奉れ。」とのりたまひき。ここをもちて猿女君等、その猿田毘古の
男神の名を負ひて、女を猿女君と呼ぶ事これなり。

つまり、猿田毘古大神という神の存在は誰も知らなかつたのを、お前がその神を顕わしたのだから、宇受売よ、お前
がその神の名を負つて、その神に仕えなさいということで、それ故、天宇受売命の子孫の女たちを猿女君と称するの
だということです。

さて、この説話は、現実的に考えれば逆でありまして、天宇受売命の子孫である猿女が齋き祀る神だから、猿田毘古の名が生まれたのだと考えなくてはなりません。つまり、祭る者よりも祭られる神が先に存在する必要があるから話が逆になったので、こうした神話特有の叙述を、叙述の上のトリックと考えてよいのではないかと存じます。

父親の権利 次の話、父親の権利を示すと思われる説話に関して申し上げます。私の気の付いた話は二つございます。まず、その一つ。兄の八十神に迫害されて大国主神は根の国を訪れます。そして須佐之男命の許へ参りまして、娘の須勢理毘売と逢うと、互に氣に入って契りを交わします。美しい神が訪れて来たと聞いて、須佐之男命は立ち出でて大国主をみると、「こは葦原色許男と謂ふぞ」と直ちに断言します。この名の意味するところはよく判りませんが、書紀に葦原醜男と書かれているところから常識的に考えて、日本の見苦しい男という意味なのかも知れません。そしてこの葦原色許男という名は、大国主神の別称としてはこの部分にだけしか使われて居りません。尤も大国主神の異名を列記した部分には、記紀俱に見えて居りますけれども、それは説話を後から整理統一した結果だと考えられますので、葦原色許男が大国主の異名として、説話の中で語られているのはこの部分だけでございます。

さて、もう一つの話は山幸彦——火遠理命の海宮訪問の話でございます。火遠理命が海幸彦——火照命から借りた釣針を魚に取られてしまったために、塩椎神の助けで海若の神の宮を訪れます。そこで海の神の娘、豊玉毘売命と逢いますと、やはり互に氣に入って、豊玉毘売は父に麗しい人が来たと告げます。海の神は自ら出てみて、「この人は、天津日高の御子、虚空津日高そらつひこぞ」と申します。この虚空津日高という名は特定の男性の一般的呼称のように聞こえますが、天津日高の御子という限定詞を上冠せて居りますから、葦原色許男のように固有名詞のつもりであったことは疑いありません。この名前も海若の神と塩椎神が使っているだけで、他所には出て参りません。

以上の二つの話は、娘の父親が娘の良人になるべき人を、父親自身でその顔を見て、この男はこうした素姓のこういう名の男だと判定したという話で、初めて逢ったはずの男の素姓をどうして知ることができたのだらうかと不思議に思われる話であります。その理由は父親だからだとしか考えられません。しかし、父親だからといって元よりそんな能力があるはずはございませんから、恐らく、この話は、父親の権利あるいは義務として、娘の良人になる人物を判定するということがあったからではないかと私には思われるのです。父親と申しまして、今日のように夫婦同居

——つまり父親と母親とが一軒の家に常に一緒にいて、子供たちを育てているといった家庭を考へてはいけな
で、父親と子供たちとの関係というものは、母親と子供たちとの関係よりも接触の度合が薄かったの
だろうと考へて居ります。殊に娘との関係は一層薄かつたろうと想像して居ります。そうした父と娘との
関係の中で、父親に課せられた最も父親らしい役目は、娘の婿が立派な男かどうかを判定するとい
うことであつたのだろうと存じます。そうした娘の婿の候補者についての父親の人物判定を、婿
となるべき男性の名前に象徴させたものが、この二つの説話に現われているのだろうと存
じます。くどいようですが、この葦原色許男とか、天津日高の御子虚空津日高とい
うのは、實際の名前ではなく、父親の価値判断を人格化したものと思われま
す。これも、古代伝承におけるトリックと言へる言えると存じます。

沙本毘古討伐 古事記、垂仁天皇の条に見える沙本毘古王の反逆の件りには、いろいろと興味深い記事がござい
ます。垂仁天皇の後、沙本毘売は兄の沙本毘古王から反逆の計画に引き入れられて、良人の垂仁天皇を刺せと命ぜられ
ますが、沙本毘売の膝を枕に寝入っている天皇を刺すことができず、思はず良人の顔に涙が滴つた時、天皇は沙本の
方から村雨が降ってきて、錦色の小蛇が己が頸にまつわり付いた夢を見て眠りから覚めます。この話はローマ神話の
「クピドーとプシュケ」の話にそっくりですが、問い詰められて兄の謀反を告白した沙本毘売は、兄が立て籠もる稲
城の中へ身を投じて、兄と運命を共にしようといたします。ところが沙本毘売は稲城の中で、天皇の皇子を産み落し
ます。これが後に、八握鬘胸前に至るまで物を言わなかつたと伝えられる本牟智和気の皇子ですが、その御子を帝へ
お渡しするについて、帝の方では力士に命じて、御子と同時に母の後も連れ帰れと命じます。そして、その御子を引
き渡す時、御子を抱いて稲城の外へ出た沙本毘売を捕えようとして、力士たちが髪の毛を握むと髪の毛がつるりと取
れてしまった。今度は手を握ると、玉の緒が簡単に切れてしまう。次に、御衣を握むと、御衣がたやすく破れてしま
つて、遂に后を捕えることができないで空しく立ち帰つたとあります。それは、沙本毘売の方でその事を予期して、
予め髪を剃ってシャグマみたいに、髪の毛を頭の上に載せていたこととす。また、腕に巻いた玉の緒は腐らせ
ておき、衣服はこれも酒にひたして腐らせていたという訳でございます。

考へてみれば、まことに凝つた話で、御子の引渡しは兵士にまかせれば、こんな手のこんだ工作をする必要は一切

ないし、こうした工作をしておけば絶対に捕えられないと予想するのも不思議な話で、現代風の理窟を言ったら限りがありません。やはりこれは、物語を興味深いものにするためのトリックであったと申せます。

日本武尊の 景行天皇の皇子、小碓皇子は大変な偉丈夫でございまして、日本書紀によりますと、容貌魁偉、身長熊襲討伐 一丈と書かれて居ります。まるで銅像みたいな人ですが、それは勿論オーヴァーな表現に違いないとして、書紀の景行二十七年の冬に、熊襲征伐を命ぜられまして、遙々と西国へ出発いたします。ところで、熊襲の首長に川上梟帥という豪傑が居りました。その川上梟帥を何とかして殺そうというのが、小碓皇子つまり日本武尊の目的であった訳です。尊は、川上梟帥が丁度酒宴を催している席へ、童女の姿となって入り込み、川上梟帥に近付きますと、梟帥は日本武尊扮するところの童女の美しい容姿をめめて、酒を飲ませ、戯れ、愛撫したとあります。どうもおかしな話で、容貌魁偉、身長一丈もあるそんな氣持のわるい女の子をどうして、川上梟帥も物好きな話だなどと言えば、笑い話になってしまいますが、こうした矛盾ということも、結局はその背後にトリックがあるからだと申せましょう。

太刀易え譚 古事記によりますと、倭建命の西征の最後は、出雲建の討伐になって居ります。出雲国に入った倭建命は、出雲国の首長だっと思われの出雲建に近づいて友人となります。尤も私自身は出雲建は個人名とは考えて居りませんが、今は古事記に従ってお話している訳であります。さて、友人となった出雲建と一緒に、命は肥河へ水浴に参ります。その時、倭建は本物の太刀とそっくりな木刀を作って、自分はそれを腰につけて行きます。やがて河から上った倭建は出雲建の太刀を佩き、太刀を易えることを宣言し、後から上ってきた出雲建に勝負を挑みます。倭建の木刀を否応なく持たされた出雲建は、その刀を抜こうとして抜けないでまごまごしている内に、倭建に殺されてしまいます。

これと全く同じ形式の話は、書紀の崇神天皇紀に見える出雲振根が、出雲の神宝を朝廷に独断で献上した弟の飯入根を止屋の淵でだまし討にする話です。

私はこの説話を「太刀易え説話」と勝手に名付けて居りますが、何も倭建命自身が、本物そっくりの木刀を身につけなくとも、相手の太刀を奪うとか、遠くへ投げ捨てればよいのに、随分と手のこんだ工作をしたものです。これを

古代の人々は、知恵のある英雄の物語として、物語に内在するトリックに敢えて気付かぬままに、大きな興味をもって迎えたのであらうと思われれます。相手から刀を奪えばそれで十分だと考えるのは、一種の実用主義です。人間の知恵によって最後まで殺す相手をだますのだというところに、古代人が拍手喝采するような古代的興味があると同時に、それは古代的真実であったのだと言えましよう。

○

古代伝承というものを、現代の立場からみて矛盾する点を指摘するならば、もっと多くの説話を挙げることができます。例えば、古事記に見えるところでは、倭建命の後弟橘橋売命が走水の海へ身を投じた説話など、海上に幾重にも畳を敷いたとあるのは、人身供犠に伴う祭儀の形式と考えられる一方、波を鎮める模倣呪術であったらうとも推測されます。もしそうだとすると、波を鎮める目的に二つの手段が同時に実施されているということが矛盾になります。また、同じく古事記の雄略天皇の条には、引田部赤猪子の話がございます。引田部赤猪子が少女の時から老婆になるまで、帝のお召しを待ちつづけたが、遂にお召しがないので、若い先短い身の上を考えて宮廷に参候すると、帝はその事をすっかり忘れていらつしやうた。しかし、今更老婆と男女の契を交わすことを憚って、御歌と数多の禄を賜わつてその老女を帰宅させたとあります。この説話では、帝はまるで年をとつて居られない。何十年前前に少女だった赤猪子に声をかけた時と同じように、帝は今でも青年のようです。これは矛盾としか言いようがありません。

こうした例を探せばきりがながないかも知れませんが、今日の私の話は、古代伝承の矛盾する構成要素の中から、古代的トリックと言えるような話を選んでみたわけですが、これらを一口に言えば、事実性と真実性との問題として処理できるのだらうと思われれます。この事実と真実との問題について一言申し上げるならば、いかにまことらしからぬことでも、事実は事実であつて重みもありますが、事実そのものが文芸の世界ではいつでも真実になるといふことはない。かつて事実の片鱗すらなくとも、真実には永遠の価値があります。文芸の究極の目標が真実の獲得にあるということとは、やはり変らぬ真理であらうかと思われれます。近代の文芸、殊に自然主義系列にある文芸では、真実へ事実を近づけようとしている。つまり、事実を無視して真実を出そうというのではなく、事実を真実に仕立てようとしてい

るといふことです。何にせよ眞実性の尊重は芸術の世界のものと申せましょう。

ところで文芸というものも、古代に遡るにつれて合理性を喪失してゆくという一面がございます。合理性の喪失ということとは、合理性の立脚点が事実からの帰納にあるということと考ええると、それは眞実性の喪失という結果にもつながって参ります。この、古代における合理性の喪失、すなわち眞実性の喪失ということは、事実を無視して、その代わりに眞実性をかち取るうとするものではなかった。古代人にとっては事実より大切なものがあつたのだと思ひます。それは何であつたか。古代人にとって事実より大切なもの——それは、ある結果をひき起こす重要な契機といふものであつたのだと存じます。その重要な契機にトリック的要素を含むものがある、というのが私の今日の話でございます。

(付記) 本稿は昭和五十年五月十七日の鹿児島大学での公開講演に使用したメモと、その際の録音とにより再構成したものです。

注1 私がテスト結婚と言つたのは、便宜的な言い方で、近代の農村では「足入れ婚」といふところもある。その期間に夫婦として終生結ばれるかどうかを決めるので、主として男の方にその気がなければ、結局本式の結婚に至ることなく、破談になつてしまふ。「梁塵秘抄」に見える歌謡に、

冠者は妻設けに來んけるは、構へて二夜は寝にけるは、三夜といふ夜の夜半ばかりの曉に、袴取りして逃げにけるは
(卷二・四句神歌)

というのがあつるが、この歌は「所願はし」の前に、テスト結婚の相手の女性の家から逃げ出した若者の様子を歌つた歌謡である。恐らくこの若者は結婚適令期を迎えたというだけで、本氣になつて結婚する心構えも持つてはいなかつたのである。